

「母と娘」(by D.H. Lawrence)における「娘のアイデンティティ」探求

田部井, 世志子
北九州市立大学文学部

<https://doi.org/10.15017/1654553>

出版情報：言語文化叢書. 15, pp. 46-71, 2005-03-18. 九州大学大学院言語文化研究院
バージョン：
権利関係：

「母と娘」(by D.H.Lawrence)における「娘のアイデンティティ」探求

田部井世志子 (北九州市立大学文学部)

...

I have found you again; you have come back to me

You are my Beloved

You are mine

You are mine

You are mine

(*Beloved* by Morrison 227)¹

.....

おまえを見つけたよ、おまえはわたしのところへ帰ってきてくれた。

おまえはわたしのピラヴド

あなたはあたしのもの。

おまえはわたしのもの。

あなたはあたしのものよ。

序

人間は様々な関係の中で生きている。プライベートな領域における男女関係、同性関係、家族の中には夫婦、親子、兄弟、姉妹関係、その他の親族関係、また社会においても様々な関係が築かれている。小説世界ではこれらの人間関係の中から、ある時は一つの関係に焦点を当てたり、またある時は様々な関係性の中で生きる人間模様を描いたり、といったように、パターンは様々あるものの、多かれ少なかれ人間関係が描かれている。その人間関係の中でも親子関係に絞ってみれば、父一息子、父一娘、母一息子、母一娘といった基本的な関係パターンがある。その中でこれまでよく取り沙汰されてきた問題に母子密着がある。

母と子の密着といえ、誰しもまず息子と母親の関係を想起するだろう。とりわけフロイトのエディプス・コンプレックスはあまりにも有名であり、日本においてもそのテーマを扱った「冬彦さん」の物語についての会話が一時期巷を駆け巡った。しかしながら臨床心理士信田さよこ氏も述べるように、本来母と娘の関係の方が「歴史的に見ても」古く、「夫婦を基本とした近代家族が出現したのは最近のこと」で、「そもそも母と娘は母系制でずっとつながって」(121) いたのである。その関係は長い歴史を持っていたにもかかわらず、また、ロレンスの言葉を借りれば「母権制社会はこれまでも存在してきたし、今後も存在しつづけるであろう」(“*Matriarchy*” 550) にもかかわらず、母子問題といえ、焦点が当てられるのは息子と母親の関係であった。母一息子関係、あるいは他にも、父一息子関係は比較的取りあげられる頻度が高いにもかかわらず、母と娘という女同士の関係が問題にされることがほとんどなかった事実を水田宗子氏も「序」の中で次のように述べて

いる。

女と女の関係、女同士の影響とその絆、母と娘の関係、母の娘への影響とその絆は、フェミニズムがそれについて語りはじめるまで、ほとんど無視されてきた、書かれなかった歴史であった。それが女性の内面の成長や人間形成にどのような影響を与えたかが、批評のテーマとして分析され、考察されることはほとんどなかったのである。(14)

しかし今フェミニズムが流布する中、変化が起こりつつある。棚沢直子氏はまずキリスト教圏においてはとりわけ母親というものが「忘却」され、女と女の関係が男によって解体されてきたと分析する。そして現代フランスの研究の流れを追いつつ「女性解放には母娘関係の考察が必要だ」と主張するイリガライやクリステヴァたちを取り上げ、近年ようやく母と娘の関係に焦点が当てられるようになったという(49)。² 今や母と娘の関係は、フェミニスト批評にとって避けて通れない重要なテーマなのである。

このような状況の中、日本ではまるで友だちのように仲のよい母娘の関係が心理学者や社会学者の間で様々に取り沙汰されており、³ 精神科医斎藤学氏による「母娘カプセル」(84)といった表現(娘と母親との「べったりと密着した狭い世界の中で生きている」女同士の関係)、あるいは信田氏による「一卵性母娘な関係」などの名称も生み出されている。これらの名称が流布する背景には、母と娘がそれぞれのアイデンティティを融合させてしまい、とりわけ娘が自己のアイデンティティを確立できないといった現実問題が潜んでいる。

近年フェミニズム関係の書物が数多く出版されているが、女のアイデンティティの問題といえば、様々な分野からアイデンティティの危機についての考察を深めている社会学者ナタリー・エニックの啓発的な書、『物語のなかの女たち——アイデンティティをめぐる——』を忘れてはならないだろう。エニックはその中で、主に近代欧米の文学作品(主に小説、他におとぎ話や戯曲、映画なども含む)に連綿と流れ続けている女の自分探し、つまり、アイデンティティの形成と危機の問題を学際的に追究した。エニックは小説の従来の読みについての欠陥を次のように指摘する。

……若い娘が男に立ち向かう、あるいはより一般的に性関係してくる年齢に娘が賭けるものは、性的なものだけではなく経済的なものであり、とりわけアイデンティティに関わるものなのだとすることを、見ようとしていないからである。(46-7)

そして、女のアイデンティティに目を向けようとしない「典型的な男性中心主義」な読みを痛烈に批判し、女のアイデンティティ探求を巡る視点で小説等を読み直すことの必要性を説いているのである。もっとも、エニックがとりわけ関心を示しているのは、「二番目の

女コンプレックス」⁴——「男にとってのエディプス・コンプレックスとまったく等価の女性のコンプレックス」(213)——であり、特に母と娘のアイデンティティの問題⁵をクローズアップしているわけではない。しかし、女の視点で見た場合、母娘関係におけるアイデンティティ追求の問題も決してマイナーとはいえないだろう。本稿で光を照射するのはまさにその領域である。

*

*

*

扱う作家は、ケイト・ミレット(『性の政治学』1970年)以来、「性差別主義の権化」、あるいは「典型的な男性優位主義者」といった、辛辣で重苦しい肩書きを付され辛酸をなめてきた(田部井2、192)D・H・ロレンスである。⁶ロレンスも人間関係を主に描いた。とはいうものの、彼の場合、その人間関係のほとんどが何らかの形で性を巡る関係になっているのは事実である。性を巡る関係といった場合、普通は男女関係に限定してしまいがちだが、ロレンスの場合は男と男の関係も描いており、ある批評家はいわゆるホモセクシュアル説を掲げ、またある者はドイツ的な同胞愛説を唱えるといったように、様々に取り沙汰されてきた。

ではロレンスの描く女同士の関係はというと、これまで正面切って取り上げられることはほとんどなかった。もっともいくつかの作品において女と女の関係がむしろ前景に出ているものもなくはない。『狐』(*The Fox*)では最初からマーチとバンフォードという女性二人が登場し、タイトルの狐を想起させる男性ヘンリーが重要な役割を果たしてはいるものの、女同士の関係がどうなるのかは、確かに読者が惹きつけられる関心事ではある。また『虹』(*The Rainbow*)⁷の中のアーシュラとウィニフレッドのレズビアン的關係も忘れてはならない。しかしこれらの作品において、いわゆる女同士の関係は「不毛」のレッテルを貼られてしまう。例えば『狐』に登場する女性二人のロレンスの描写について山口哲生氏は次のように述べている。

……異性を排除した女性ふたりだけの、生殖性を拒否した、あるいは生殖性の不可能な関係が、不毛性・非生産性の象徴として描かれている。女ふたりだけで経営する農場の鶏は卵をうまず、牛は子をうまず、ひたすら農場にとじこめられているだけである。(101)

このように女同士の関係は不毛なものとして描かれ、物語の中心はロレンスの他の作品の例に漏れず異性愛へと傾いていき、同性同士の関係は異性愛に比べればあくまで副次的なものにすぎないという印象を与える結果になっている。

それぞれの個を具えた二人の女同士の関係でさえこのように脇に追いやられる中、題辞で取り上げたような、「おまえはわたしのもの あなたはあたしのものよ」とお互いにいってしまいたくなる関係、母娘の関係ということになると、ロレンス文学においては重要なテーマとして前景に出ることはほとんどない。⁸そのような状況の中、本テーマそのもの

をタイトル名に用いている短編「母と娘」(“Mother and Daughter” 1928年執筆、1929年『ニュー・クライテリオン』誌8号に掲載)が存在する。以下、ロレンスがいかに母娘を描いているのかを追いつつ、母と娘の關係にまつわる問題点を明確化し、とりわけ娘のアイデンティティ追求の問題に考察を加えてみることにしよう。

第1章： ロレンス文学における母と子⁹

母娘の關係を論じる前に、ロレンス文学の重要なテーマの一つである母と息子の關係について触れておきたい。いわゆるマザー・コンプレックスのテーマは、ロレンス研究の中では十二分に議論を尽くされた感がある。代表的なものとしては Judith Ruderman の *D.H.Lawrence and the Devouring Mother* (1984) が挙げられるだろう。その中で Ruderman は、ロレンスの「指導者原理の小説」群を中心に扱い、「家庭で女が支配すると、より偉大なる仕事をしようとする男が駄目になってしまう」(169) ということ論証し、息子に与える母——とりわけ「食り食う母」(“devouring mother”)としての母——の影響を心理学的かつ総括的に論じている。また日本でも山口氏がタイトルに「母」を用いた『D.H.ロレンスにおける〈母〉』を弓書房から1989年に出版し、母と、母に呑み込まれる息子の關係を議論するだけでなく、その構図——母親的な女と呑み込まれる男——は恋人同士においても見出すことができ、ロレンスの作品全体を通して見た時、常に「母なるもの」が存在していると主張する。

母親は死んだが〈母〉は生き続け、その後【『息子と恋人』以後】のロレンスの作品に負の価値の母性となってとりついた。作品の中に母親は登場しなくても、常に〈母〉はいる。……すべてはポールの母親体験からはじまっているから、その後の作品も『息子と恋人』の延長線上にとらえると、ロレンスの〈母〉物語として読める。ロレンスは男性と女性の關係を描くときに、ポールと母親の關係に根ざした心理葛藤をあきもせずくりかえし語っているが、これは〈母〉にたいする彼のこだわりがいかに深く、しぶとく、苦渋に満ちたものであったかの証拠である。(169)

確かにそれは、例えば『恋する女たち』(*Women in Love*)におけるバーキンのアーシュラとの葛藤にも見え隠れするものであった。いずれにせよこれまでの批評家のこだわりは、男の子への母の影響であり、男の子の自立の問題であった。

また母と子という場合、ロレンス自身の関心もまた母と息子にあったことは、一般論として母子について論じた「子どもと母親」(“The Child and his Mother”)において、彼が子どもを指す代名詞に“it”だけでなく、あえて“he (his)”を用いている事実からも明らかだろう。ロレンス自身が男であり、自身の母との葛藤を考えるとそうなるのも無理のないことであるかもしれない。因みに彼が紹介文を書いた Grazia Deledda の *The Mother* のテーマも息子に対する「野蛮な」母性¹⁰の支配力であった (“*The Mother, by Grazia*

Deledda” 265)。

では、子どもへの母の支配力は娘には及ばないのだろうか。母性を捧げられ、あるいは母性の支配下で萎縮する存在として、これまで息子に焦点が当てられてきたが、娘に対する影響は果たしてないのだろうか。斎藤氏は次のように述べている。

「冬彦さん」のように男性だけがマザコンになるのかということ、そうとは限りません。昔からあったものですが、最近になってとくに注目され始めたのが、母親と娘の密着関係です。これは、母親と息子の関係以上に考えなければならない問題です。(82)

これまで正面切って論じられることの少なかった母娘の関係であるが、このようにマザー・コンプレックスの問題は母―息子の関係だけには留まらない。これは「今後もっと掘り下げられなければならない問題」(水田他 260)なのだ。また、斎藤氏は娘への母の影響は、息子に対する影響以上に「複雑」な問題を内包しているというが、どういうことなのだろうか。母子関係における子どものアイデンティティ形成のプロセスについて論じたエニックの言葉がヒントを与えてくれそうである。

アイデンティティの問題をもっぱら「同一化」としてのみ考えれば、女のアイデンティティにはほとんど難しい問題などないように思われる。同性の存在と同化することほど簡単に「当たり前」のことがあるのか——それに比べると、男のアイデンティティ構築は困難のように見える。ところがアイデンティティ構築作業におけるもうひとつの、それとは逆の次元、つまり分化をも同時に考慮に入れ出すや、事情は大きく異なってくる。……

この分化という観点を考慮に入れると、どうなるだろう。アイデンティティの分化は、男の子にとってはほとんど問題にならないのに対し——なにしろ性が違うので苦もなく分化できるゆえ——、逆に女の子には困難な問題となるように思われる。女の子は母親によって体現される己れの性への準拠を棄てなければ、自分自身になれないよう定められているからである。(354)

母と娘の関係にあつて、娘が自分自身を見出し、自己のアイデンティティを確立するために必要なことは、「私の中の『私』、私の中の『母』を分けていくことが、親の生き方にとられず、自分自身の人生を形づくる能力につながる」(斎藤 110)のである。では、ロレンスの短編「母と娘」において、娘ヴァージニアのアイデンティティは果たして確立できたのだろうか。

第2章： 「母と娘」

「母と娘」はこれまでほとんどロレンス研究において扱われることがなかった。物語の

興味深い展開がほとんどなく、語りも単調で、ロレンスのパターン化された筋書きの一つ（浅黒い肌の小男に救われる女、雌なる母性と雄なる父性の葛藤と最終的な雄の勝利）にこだわるなら、「母と娘」からは新たな興味をそそられることはなく、本作品はあえて論文の題材として選ぶにはあまりにもマイナーな小品と考えられるだろう。

もっとも本作品について論じた批評が全くないかという点、必ずしもそういうわけではない。例えば Lydia Blanchard は “Mothers and Daughters in D.H.Lawrence: *The Rainbow and Selected Shorter Works*” の中で母と娘のテーマを前面に出し、『虹』をあくまで中心に据えてはいるものの、『セント・モーア』(*St Mawr*) や「母と娘」についても母娘の関係に焦点を当てて論じ、それらを比較分析することで作品の奥行きを拓けることに成功しているといえよう。¹¹ しかし Blanchard の関心はやはり、母娘の関係が「男性との関係において」いかなる影響を与えるのかという問題に移行しており、また最終的に物語の「破壊的な結末」解釈も含め、母娘の関係をロレンスの主張する人間関係の葛藤の問題へと一般化してしまっている点に不満が残らなくはない。

他にも Sheila MacLeod は、ロレンスが「息子だけが母親の力に圧倒されているわけではない」(155) として、母が与える娘の影響について言及はしている。しかし残念ながら MacLeod の関心は、結局は Ruderman と同様、娘にではなく母親に向けられていき、ロレンスが女性の榮譽を母性にではなく妻性にあると考えていると主張するに至る (159)。更に MacLeod は、ロレンス自身が自己の男としてのアイデンティティを確固としたものにするために母性を否定したこと、そして彼が拮抗し合う男女の和解を可能にするものとして「結婚」という性的な関係を求めたと指摘するに留まっている (170)。

以上のように、結局批評家たちの関心は、作家ロレンス自身と彼の教義に、あるいは男の立場から見た女性観に向けられており、作品中に描かれる母と娘の独特な関係性や、とりわけ「娘」の在り方の問題がどこかに置き去りにされている。そこで以下、母娘の関係における、とりわけ娘の側のアイデンティティの探求というテーマに焦点を絞り、具体的に物語を見ていくことにする。

1. 娘のアイデンティティ探求

ヴァージニア・ボドインは、社会的には政府の役職を得て、社会的地位もあり、また経済的にも自立した 30 歳過ぎの女性であった。一方母親レイチェルは、「独立独歩の自立した女性」(226) であった。ヴァージニアは母と別々に住んでいれば「自由」を味わえていたものを (221)、結局共に住むことになってしまう。母との密着関係を緩めてくれる可能性のある男性との関係が全くなかったわけではなく、例えば音楽家のヘンリー・ラボックと「結婚したも同然の生活」をしたこともあった。しかし彼との関係においてヴァージニアは常に「娘に対する母親の支配力」あるいは母の内なる「奇妙な雌の支配力」を感じていた。しかも母親のその影響のもと、ヴァージニアまで無意識の内に男を「やり込めて」「無の存在に」(223) してしまうのだった。ヘンリーはそのような状況に耐え切れず、ヴ

ヴァージニアのもとを去ってしまう。その後、母と娘は「結婚生活」(228)と表現されるくらしい母娘密着生活を開始した。

その後母親はハンマーともいべき「雌特有の恐るべき気紛れ」(235)によって周囲の若者たち、あるいは彼女がかかわりを持つすべての人々の頭をことごとく打ち砕き、「無の存在」(230)に帰してしまい、彼らの「内なる自発性」を抹殺してしまう。娘に向かう支配力は、このような形で周りの人間にも影響を与えるのだった。

もっともエイドリアンの場合だけは違った。ヴァージニアにとってはいわゆる「いい子ちゃん」(232)にすぎないエイドリアンであったが、母親にとっては、自分の支配下におさまってくれる「お気に入り」(231)だった。そのため母親は唯一彼を娘の結婚相手として認め、また彼女の魔の手(ハンマーの一撃)が彼に及ぶことはなかった。

娘と母は、男が入り込もうにも入れない二人だけの排他的な世界にたゆたう。その状況をロレンスは「悲劇」(230)と捉えている。それが悲劇なのは、母親としては娘の結婚を望んでおり、「娘の相手として役不足な存在に男たちを変えてしまう催眠力のある呪文」をまさか自分自身が行使しているとは思ってもいない点にある。自分自身は優しい母親として衰弱していく娘のことを心配している様子を見せ(234)、また、「わたしはあなたの単なる『付き添いの女』にすぎないわ」(229)と卑下しつつも、母親は娘を自分の「呪文の完璧なる支配下」(228)においてしまっていた。ヴァージニアの「引き立て役」(230)になろうとしたのも見せかけにすぎないのだ。母親レイチェルは娘を思うがゆえに、意に反して娘をがんじがらめにしていく。このようなヴァージニアの状況は、水田氏が論じる次のような状況に当てはまる。

……強い母親への恐怖の場合、母親に依存さえしていれば、娘の幸福を願う母親は、いつも娘の保護者として振る舞い、庇護してくれますが、それはまた、娘がいつまでも母親に所有され、管理されていることにほかなりません。強い母からの娘の逃走は、娘にとって母親が強い影響力、支配力をもつ存在であっただけに、これまたきわめて困難です。(水田3、186)

ヴァージニアは母親に所有されたままで、自立への道はますます困難になっていく。ヴァージニアは「仕事による緊張と、絶え間なく襲ってくる母親の恐ろしい精神の緊張のもとにあって、体力も限界状態」(233)になり、やがて病気になっていく。母親の「表面的な」庇護が、自分らしく成長しようとするヴァージニアの生命力をそぐ結果になっているのだ。

さてこれまでのヴァージニアの行動を彼女のアイデンティティ獲得という視点から見ると、彼女の当初の行動パターンは基本的に母親の真似をし、母親のいう通りに従い、逆らわないいわゆる「いい子ちゃん」の行動であった。ヴァージニアが母親を真似し、母親に追従することでよしとしていたことは、「もちろん私はお母さんの古くなった靴で人生を乗り切るわ」(225)という彼女の言葉に象徴的に表現されている。このようなヴァージニア

から自己のアイデンティティを求める姿は窺えず、ヘンリーも彼女と母親が別の存在であるとは思えなくなってしまう (223) ほど、ヴァージニアには自己のアイデンティティが欠如している。ヘンリーが去った後、5年間というもの、母と娘はお互いに避けあつたにもかかわらず、両者の間の魔力はなくならず (224)、ヴァージニアは母親の存在がこの世のどこかに存在することを常に意識することになる。そしてまた両者は和解をし、かくして二人は現代でいう「母娘カプセル」さながら一緒にアパートに住むことになるのだった。

二人はこうして表層的にはほとんど同じような存在として描かれるが、ロレンスの筆致は両者の根源的な相違を鋭く抉り出していく。徹底的に袂を分かつことになった二人の相違点は、男とのかかわり方にあった。母は娘が自分と同じ「一人の男と添い遂げるタイプの女」(“a one-man woman”) だというのが (227)、その言葉からは、娘を自分と同じタイプであると考えたい、あるいは自分自身もそのようなタイプであると思いたいという母親の願望が読み取れる。しかしヘンリーによると母親レイチェルは実のところ「男を必要としない女」、「雄なるものをすべてこの地上から払拭してしま」う女であり (230)、だからこそ男たちは彼女といると「不安になり、恐怖をさえ感じる」のだった。

ヴァージニアが最終的に結婚相手として選んだアルノーはレイチェルのことを「貞節を表したオブジェ」、「ほとんど完璧」で美しい女性であると賞賛はするが、同時に彼の「白くなった濃い眉毛」が次のように物語っていた。

‘But what, under holy Heaven, are you as a woman? You are neither wife nor mother nor mistress, you have no perfume of sex, you are more dreadful than a Turkish soldier or an English Official. No man on earth could embrace you. You are a ghou, you are a strange genie from the underworld!’ (240 - 41)

語り手が挿入するこのようなアルノーの独白からは、レイチェルのような女性に対するロレンスの痛烈な批判が感じ取れる。他方ヴァージニアは、仕事をするには「誰か男が彼女の動きを開始させる必要があつた」(227) と描かれる存在であり、動くには男性の力が必要だという。かたや男を必要としない母、かたや男を頼りにし、男を必要とする娘。母と娘とは生来「正反対の人間」(225) であるにもかかわらず、娘は母の支配下で身動きができないまま、母と表層的に同じような行動や生活を余儀なくされていたのだった。

女同士の友人が排他的な世界を作り出す場合は、ロレンスにいわせれば不毛性の問題は残るものの、一方の個が他方の個によって無にされてしまうことはまずないだろう。しかし母娘の関係において娘は自分自身を失ってしまうことに繋がる。母親の真似をし、母親の支配の内にたゆたっている、自己の存在原理に従って生きられず、結局は自分が発見できないのである。娘はアイデンティティを得られないまま、ますますパワーを奪われ病気になるのだった。

しかしヴァージニアは昨今の「一卵性母娘」の合体状態のまま、母に呑み込まれたまま、

甘んじていられる娘ではなかった。実は彼女は早い時期から抵抗は見せていたのだ。例えば、ヘンリーが去った後、母親から「断固として一步退く」(223) 努力をしたり、母親のお気に入りであるエイドリアンをあえて否定し(232)、取り合わなかったり。そしてついに、「母娘カプセル」から抜け出るためにヴァージニアの反撃が開始される。

ヴァージニアの反撃を見る前に、ここでなぜ母親が子どもに固執するのかという問題に一つの方向性を与えておきたい。個々のケースにはもちろん様々な要因が考えられるものの、ロレンスにも関係のある理由を考えるならば、一つには斎藤氏が述べるように「夫との関係に満足していない寂しい母親」が、「子どもをなかなか手放さなくなり」、「いつまでも自分の思いどおりになる『お人形』にしておこうとする」(84) から、という理由を挙げることができるだろう。¹² 父親不在の問題は1963年にドイツの精神分析学者ミッチャーリヒが、現代を「父親なき社会」とであると指摘したことをもって嚆矢としている(大日向163)が、母子密着の問題を解消する鍵は父親(男性)にあるといっても過言ではないだろう(信田130、170)。現にこの物語においてヴァージニアを母親の魔法から救うのは、不在の父親ロバート——物語の冒頭から不在であることを強調される父——と、父親の男性アルノーであった。父親の力を借りて反撃をするというのは、あくまで象徴的な物言いであり、実際にロバートがヴァージニアを助けたわけではない。それは、ヴァージニアが母親だけでなく当然のことながら父親あつての存在であり、ヴァージニアの内なる父親的要素ゆえに母親に反抗ができたという意味であった。語り手は次のようにいう。

Virginia was the continuation of Rachel's own self. Virginia was Rachel's *alter ego*, her other self.

But, alas, it was a half-truth. Virginia had had a father. This fact, which had been utterly ignored by the mother, was gradually brought home to her by the curious recoil of the hammer. Virginia was her father's daughter. (236)

かつてレイチェルにしたたかに頭をハンマーで打ち砕かれたことのある父親が、レイチェルの娘、つまり「彼女自身の分身ナルターエゴであるヴァージニアの姿で再び蘇り、少々執念深くハンマーで叩き返し始める」(236) ことになったのだ。ヴァージニアが母親に投げかける辛辣な言葉は、父親である「ロバート・ボドインの霊が娘の口を借りて、致命的な毒気を含んで語ったようなもの」(235) となった。「ダビデの小石」(236) のようなその反撃は、レイチェルにとって「致命的」となり、ハンマーは彼女の手から弱々しく落ちた(236)。具体的には、レイチェルの申し出——アパートを手放して仕事をやめてはどうかという申し出——を拒否するという形でヴァージニアが一撃を食らわせた。

かくしてヴァージニアの反撃の第一段階——母に反駁し、与えられるものを拒絶する——は達成された。自分を見出そうとする衝動は確実に彼女の内でうごめいていたからだ。更に次の段階——母親からの乖離——へと誘う役割を果たしたのが、父親的存在である運

命の人物アルノーである。ヴァージニアは反旗を翻し、母親が賛成するはずのない男性との結婚をとうとう考え始める。母親にとって究極の決定打は、このアルノーの存在と、ヴァージニアの彼との結婚だったといえよう。

アルメニア人のアルノーは『狐』のヘンリーと同様、「狐」(246)にたとえられる60歳くらいの商人で、「根気強さで今や再びのし上がってきた」(238)。近東方面に息子をはじめ、一族郎党がおり、今は大富豪の男やもめであった。「不思議な潜在力が感じられ」る男であり、眠り姫を目覚めさせ、運命を大きく変える、ロレンスのお決まりの生命力溢れる小男である。母親にとっては「くずのような人間」(239)にしかうつらず、実際太っている彼が座っている時の「腿の短さといったら、まさに蛙のよう」で、また「奴隷」(239)のようであるとも描かれる彼ではあるが、語り手は次のように彼を男らしく生命力溢れる家父長として描写する。

... his thick, fine white hair, which stood up on his head like a soft brush, was curiously virile. And his curious small hands, of the same soft dull paste, had a peculiar, fat, soft masculine breeding of their own. And his dull brown eye could glint with the subtlety of serpents, under the white brush of eyelash. He was tired, but he was not defeated. He had fought, and won, and lost, and was fighting again, always at a disadvantage. He belonged to a defeated race which accepts defeat, but which gets its own back by cunning. He was the father of sons, the head of a family, one of the heads of a defeated but indestructible tribe. He was not alone, and so you could not lay your finger on him. His whole consciousness was patriarchal and tribal. And somehow, he was humble, but he was indestructible. (240)

それまでヴァージニアは「誰かが救い出してくれるのを待っている浮浪児」、「父親のいない浮浪児」であった(241)。一方彼はといえば、一族の長であり、「すべての時代を通して常に父親でありうる存在のようだった」。父親不在の中、父親的存在である男との関係を通じて、ヴァージニアはようやく母親の束縛からの脱出が可能となる。彼は「父親のような愛撫」(247)で彼女の生命力を回復させ、彼女を救い出すのだった。

興味深いことに、現代の「一卵性母娘という卵」を打ち壊すためにも男性(父親)が必要であると信田氏が次のように主張している。

一卵性母娘という卵の殻を割る役は、男性であると思います。父親でもいいし、婚約者の男性でもいいでしょう。最近の一卵性母娘大量出現の裏側には男性の問題があると考えています。(73)

ロレンスの小説においても、鍵はやはり父親的男性であった。物語において実父不在の中、ロレンスが何度もアルノーの描写に「父親」や「家父長」を強調するのも、ゆえなしというわけではないのである。「自分が女を捨てたのだから、娘にも女を捨てさせたい」という母親の無言のメッセージ、簡単にいえば「男を選ぶか、私を選ぶか」という無言のメッセージ（信田 156）に対し、ヴァージニアは父親的存在である男アルノーを選ぶのだった。多かれ少なかれ自立には必ず性的な成熟が伴うとは信田氏の主張でもあった（154）。ヴァージニアはかくして、自分がどうしてアルノーと一緒にいたいのかも分からないまま、彼の父親的な「確信」（242）に導かれてゆく。「恐怖」を感じつつも、白く濃い睫の下で光を放つ「魅力的で族長的」な黒い目のきらめきに引かれ、従うべきは自分の方だと考え、抗うことなく、運命に身を任せて（243）。

さてこの間、ヴァージニアに葛藤が全くないわけではなかった。¹³ 「実は彼女は母親が敗北したことに腹を立てていた」（246）のだ。「今ならまだ彼 [アルノー] を永久に追放し、母親のもとへ戻ることもできた」。しかし最終的にはそのような気持ちを振り切り、アルノーとの結婚の道を選択するのだった。物語を締めくくっているヴァージニアの自己分析の言葉、母親に対する「悪意のこもった言葉」を以下に引用してみよう。

'Perhaps daughters go by contraries, like dreams,' mused Virginia wickedly. 'All the harem was left out of you, so perhaps it all had to be put back into me.' (248)

母親との比較によるヴァージニアの自己分析、自己発見の言葉は、彼女の自立を裏づけているとっていいだろう。

「死んでしまいたいという気持ち」（246）にまで母親を追い詰めたヴァージニア。母親はすべてを奪われ、見捨てられ、パリへ出発することになる。こうしてヴァージニアは母親を「負かし」、母親の支配から自由になれたのだ（245 - 46）。

ここで疑念が生じる。アルノーとの関係を求めるということは、それが「ハーレムの」なものである限り、女にとっては束縛であり、自由とはいえないのではないだろうか。同性の「魔女」ともいうべき母親の呪縛から、父親的存在による性愛の束縛へと形が変わったにすぎないのではないか。Jeffrey Meyers が述べるように、アルノーとの関係を選択することは「一種の『生の中の死』（452）を求めるようなものではないだろうか。実際ヴァージニアは母による魔法から逃れたものの、今度はアルノーによる「魔法」（244）にかかり、「彼の勢力範囲に囚われて」いるのだから（243）。

男を必要としない魔女のような母親が、男からは独立し自由な存在として描かれるのに対し、ヴァージニアは母親とは対照的に「ハーレムの」男女関係を求めている。ハーレム社会に生きていない現代の読者にとっては、そのような社会は男尊女卑だということになり、ヴァージニアの選択は読者を落胆させるものでしかないのかもしれない。しかし本作品において最初に「ハーレムの」という言葉を用いたのはレイチェルであり、夫（男）を

見限った彼女は、男にかしずこうとする娘の生き方を擲擲するために用いたのであり、先に引用したヴァージニアの自己分析の言葉には、むしろそれを積極的に受け入れようとする強さが感じられる。そのようなヴァージニアを通じて作者ロレンスが主張している女の在り方は、必ずしも単に男にかしずくだけの自主性を持たない卑屈な女の生き方ではないのではないか。

他方レイチェルのように男の論理には服従せず男から独立した、いわゆる「自由な女」、あるいは男と同じ土俵で仕事をする女が果たしてすべて幸せだといえるのだろうか。ロレンスにいわせると、男を全く必要としない女は「不毛な」女性性を固持した存在であり、既に引用したように、彼女は「女として」は何の価値もない、「色香が全く感じられない」「不快な存在」にすぎない。このように描くロレンスはこれまでのフェミニスト批評家が主張するように「性差別主義の権化」と批判されても仕方がないとも思えてくる。しかしロレンスの主張に耳を傾ける余地はないのだろうか。

ここで「自由な女」の是非について、最近のフェミニズムの動きも念頭に置きつつ考察しておく必要がある。実際フェミニズムの観点からも再考の必要性を迫られているのである。金井淑子氏によると、今や時代はポスト・フェミニズム——近代フェミニズムがある程度達成されたものの、同時に生じてきた多くの問題を抱えて、新たにフェミニズムを見直そうとする時代——であるという(98)。「自由や平等と引き替えに……女性はこれまで経験したことがないほど大きな重荷を背負い込んだ」というたメッセージや、「女性の不幸はまさしく自由の代償で、解放はむしろ女性を不自由にした。自由の代わりに、もっと大切な女の幸せを取り逃がした」といったフェミニズム批判が1980年代から広まりつつある(Faludi 参照)中、「フェミニズムは女性の置かれている状況の『危機』を見、今自己を見つめ自助努力の真っ只中で新しい局面を迎えようとしている」のである(金井 120 - 21)。

またエニックもロレンスの『恋する女たち』に関する議論の中ではあるが、「自由な女」、あるいは「縛られない女」につきものの、「移ろいやすさや不安定さ」(338)について次のように述べている。

こうして愛というものが受け継がれてゆかなくなるとともに、孤独が現代女性の常態となる、と言っても過言ではないだろう。それは彼女たちが手にした自由のほとんど避けがたい結果なのである。つまり縛られない女は、足枷を解かれると同時に、伴侶のない女にしかなれないということなのだ。なるほどこの孤独は避けがたい運命と言うわけではなく、孤独と一口に言ってもそのありようはさまざまであろう。……自由な女の孤独とは、その構造からくる定めなのであって、望もうが望むまいが、それとは折り合いをつけてゆかなければならない——それを受け入れるにせよ、拒むにせよ、かなり狭い可能性のなかで何とかやってゆくにせよ。(342)

男から独立した、いわゆる「自由な女」は確かに束縛を解かれ自由を謳歌している。しかしエニックが述べるように、強い束縛のために選択の可能性がなかった不幸に代わって、可能性しかない全方位の自由が女たちを不安にするのである。また、「自由な女」であるからといって、単純に「自分とは誰なのか」という問題に答えが出るというわけでもないという。自らの意志や努力のみを頼りとしてアイデンティティを構築する困難——寄りかかる対象、否定する対象のない真の困難——はより大きくなったといえる。

因みに金井氏はポストモダン・フェミニズムの課題の一つを「他者不在」と捉え、その状況を次のように説明している。

……近代主義フェミニズムの一種の自我幻想が、男と女の「対」関係を解体し、その身体性をシングル化する方向に状況を押し進めた結果ではないかと考えてきた。……その意味合いにおいても、ポストモダン・フェミニズムの課題は、近代主義フェミニズムの自我解体の帰結を突き抜けて、近代的自我に対する「私」の立脚点を掴むことにある。「私」という性的主体の関係性としてある「対関係」含めて、他者と向き合う「関係的世界」をどこで作るか。この課題を避けてはフェミニズムのポストモダンと向き合うことはできない。(160-62)

次のような議論も可能かもしれない。他者との関係性を重要視して生きること、それは確かに「私という主体がない」(石塚 251)¹⁴ ということに繋がるのかもしれないが、人間が社会的な存在である限りは、他者との関係性の中で生きていくにあたり、むしろワーズワスの「賢明なる受動性」(“wise passiveness”) よろしく、『私という主体がない』私』といった存在もあってしかるべきであり、そのような受動的な在り方にこそ賢明さが見出せる可能性もなくはないのである。人間相互の関係性を取り戻すために、一度自我を手放す必要があるのかもしれない。そういう意味でヴァージニアの選択は、他者との関係を求めているという意味で、「他者不在」の不安から解放された精神的な自由の希求であったといえなくはない。ポスト・フェミニズム的女性観を、以上のようにロレンスが先取りしていたという事実は、彼の今日的意義(田部井 2 参照)を語る上で等閑視できない重要な点の一つであることを指摘しておこう。

依然として疑念は残る。他者との関係を求めるのであれば、同性でもいいのではないだろうか。ヴァージニアが求めたのは、アルノーの言葉にもあるように、「お母さんとは異なる方法」(247) でのアルノーとの関わりであったという点にこだわってみよう。女のアイデンティティという観点で見ると、母親との関係にあってヴァージニアは最初、その支配下で自己を母親と「同一化」するのみで「分化」することができず、アイデンティティを見失っていった。しかるにアルノーとの関係にあっては、彼との性差により、女としてのアイデンティティをむしろ「分化」することができるのである。同性関係と異性関係には自ずから決定的な差異が存在するのである。アイデンティティを追求するヴァージニアが

求めるべきはロレンスにいわせれば性的差異が顕現化する後者の関係だったということになる。因みにロレンスは次の引用において、男女の愛の行為の目的について論じている。

In Love, in the act of love, that which is mixed in me becomes pure, that which is female in me is given to the female, that which is male in her draws into me, I am complete, I am pure male, she is pure female; we rejoice in contact perfect and naked and clear, singled out unto ourselves, and given the *surpassing freedom*. No longer we see through a glass, darkly. For she is she, and I am I, and, clasped together with her, I know how perfectly she is not me, how perfectly I am not her, how utterly we are two, the light and the darkness . . . (“Study of Thomas Hardy” 468; italics mine)

すなわち男女関係を営むにあたって互いに内なる異性を他者に受け渡すことで、純粋な男、純粋な女になれるのであり、それこそが男女それぞれの存在目的であるという。ヴァージニアはアルノーという男性との関係を選択することにより、自己の内なる男性性（「雄なるもの」）を彼に譲り渡し、女性性（「雌なるもの」）を自己の内に引き受けることができるのだ。ロレンスはヴァージニアに男女の性差によるアイデンティティを探索させているのであり、先に触れた「多かれ少なかれ自立には必ず性的な成熟が伴う」という信田氏の言葉も蘇ってくる。

「母と娘」の筋書きにロレンスの本質主義的男女観が窺えると人はいうだろう。¹⁵ 男女はそれぞれこうあるべきだという本質論はヴァージニアを巡る語り手の仕事観にも窺えた。物語がヴァージニアの紹介から、しかも仕事の説明から始まっているため、彼女は今日のフェミニストが求めるような、社会で男性と対等にやっつけられる自立した女のイメージで描かれるのかと思いきや、そうはならない。彼女は「本能的にできる仕事にはワクワクした」が、責任ある立場で集中して取り組まなくてはならない仕事については「ひどく消耗し尽くしてしまう」女性として、また「男に具わっている一種の戦う力が備わっていない」女性として描かれる（232 - 33）。政府の仕事が彼女にはあっていないのだ。「仕事による緊張」がヴァージニアの衰弱の原因の一つに挙げられていたことは既に見てきた通りである。その理由をロレンスは彼特有の「古いアダム」と「古いイヴ」の概念を用いて「母と娘」の中で次のように説明している。

She [Virginia] had to do it all off her nerves. She hadn't the same sort of fighting power as a man. Where a man can summon his old Adam in him to fight through his work, a woman has to draw on her nerves, and on her nerves alone. For the old Eve in her will have nothing to do with such work. (233)

ロレンスにとって「古いアダム」と「古いイヴ」とは、エデンの園でまだイノセンスを失っていない、知的意識に支配されていないアダムとイヴを意味しており（“Introduction to Pictures,” “Why the Novel Matters” 参照）、ヴァージニアの内なる「古いイヴ」は神経をすり減らす官公署での仕事には向いていないという。しかも彼女の「古いイヴ」は「誰か他の人のために仕事をしているという実感が無いから」尚更ヴァージニアは消耗し尽くしてしまうとも説明している。「精神的な責任、精神的な集中、精神的な頑張りの必要な仕事」は男の仕事で、「誰か他の人のために」にする仕事こそが「古いイヴ」の求める女の仕事だということである。

またここでロレンスがイーストウッドのフェミニスト、旧友のサリー・ホプキンに宛てた手紙を想起してもよいかもしれない。第一次世界大戦前に次第に盛んになりつつあったフェミニズム運動に対抗して、ロレンスは彼女に「選挙権を獲得することよりもっと女のためになる仕事をわたしはするつもりだ」（*Collected Letters* 171）と手紙を書き送っているのである（23 December, 1912）。選挙権よりも女のためになることとは一体何なのか。ロレンスが男女を雄鶏と雌鶏にたとえ、男女の性役割の逆転による悲劇、とりわけ男のようになった「雄鶏型女性の悲劇」について“Cocksure Women and Hensure Men”の中で説明しているので引用してみよう。

They [cocksure women] find, so often, that instead of having laid an egg, they have laid a vote, or an empty ink-bottle, or some other absolutely unhatchable object, which means nothing to them.

... It is the tragedy of the modern woman. ... She is cocksure, but she is a hen all the time. Frightened of her own henny self, she rushes to mad lengths about votes, or welfare, or sports, or business: she is marvelous, out-manning the man. But alas, it is all fundamentally disconnected. ... The lovely henny surety, the hensureness which is the real bliss of every female, has been denied her: she had never had it. Having lived her life with such utmost strenuousness and cocksureness, she has missed her life altogether. Nothingness! (555)

ロレンスはこのように、雌鶏（女性）にとっては投票権を得たり、文筆に携わったり、社会で働くより、もっと本質的に重要なこと——卵を産み雛をかえし、育てること——があるといい、更に「男は女の役割をしていようが男であり、どんなに男らしく装っていても女は女なのだ」（“Education and Sex in Man, Woman and Child” 97）という本質論を振りかざし、いわゆる「男の社会」における女性の社会的、経済的自立を否定する。このような本質論は「女性の男並み化平等」（金井 v）を求める今日のフェミニズムからすれば、女性の生き方を制限する危険思想ということにもなりかねない。しかしここで指摘したいのは、このような本質論はそれを絶対視さえしなければ、むしろポスト・モダンの今日

にあって、今一つ別の課題をも解決する一つの鍵を与えてくれる可能性があるということだ。¹⁶

ポスト・フェミニズムの課題として既に「他者不在」については見てきたが、金井氏は今一つ重要な課題として、ターニャ・モドレスキーの言葉を用いて「女の不在現象」の問題を取り上げている。金井氏によると、「もっぱら男性の作りあげた世界の秩序に女性が同一化すること」は「女性の身体や生理の条件や性的アイデンティティ」が、一切捨象された世界」(v)を生み出すことになり、そのような世界にあって今日「女の不在現象」が生じており、フェミニズムは今再び「女であること」の意味、女のアイデンティティを女性自身の側で問い返すところへと至っているという(143)。青木やよひ氏も述べるように、「なんびとも、自分の生物学的条件を否定したところには真のアイデンティティを築くことも、人間の尊厳を感じることもできない」(11)のである。

ポスト・フェミニズム時代の以上のような問題が、ロレンスの抱えていた問題意識と相通じるものであるという点を改めて確認しておこう。性差不在、他者不在の今日にあって、フェミニズムの模索する方向性——性差によるアイデンティティ獲得、並びに他者の再発見と他者との関係性の回復——がロレンスの主張と重なるのである。

とはいうものの、人間が本来一個の人間存在として生まれ出てくるからには、男女それぞれが異性に依存するだけではなく一個の人間としても自立できなくてはならない、ということは改めていうまでもないだろう。また、ロレンスの主張する「雌なるもの」「雄なるもの」の概念は今日にあってはあまりに極端であり、現代人に訴えるとは限らない。ロレンスの主張は、従来のフェミニスト的志向(男と平等の舞台で個人として独立して生きることをよしとする「娘のフェミニズム」を目指す志向)(水田2、135)からすれば、逆行を意味するものでしかない。

しかし同時に、男と女という二つの性があるからには、それぞれがお互いに補い合うことの必要性を主張するのもまた理にかなっている。それこそがロレンス文学の真骨頂であるといってもいいすぎではないだろう。性差不在、他者不在の現代社会において彼の極端な男女本質論は、それに自己を照射することでむしろ自己を相対化する手段となりうる。極端な本質論に接することで、むしろ自己の性のアイデンティティを検証し確認できるという点で、「リトマス紙的役割」を果たしうるのである(田部井1参照)。

以上のように考えてみると、女の生き方の問題は、レイチェルとヴァージニアの生き方のいずれがいいのか、あるいは悪いのかといった問題ではなくなる。要は最終的に個人がどのように生きるのかを、社会や環境によって制限されたり強いられたりすることなく、自分自身の生き方として選択できればいい問題なのである。Blanchardがヴァージニアの選択を「明らかに彼女のためになっていない」(96)と批判しているが、以上のように捉えれば、ヴァージニアの選択もあながち納得のいかないものではないのかもしれない。¹⁷彼女が自己のアイデンティティを探求するためには、母を否定し、男との関係性の中でそれを見出そうとする過程は不可避だったのである。

2. 「母殺し」から「母との和解」へ

ヴァージニアは母親から勝利を得、自己を取り戻し、アルノーとの関係を選択することでアイデンティティの確立を目指した。ロレンス、あるいは従来のロレンス研究者であれば、アイデンティティ獲得というよりは、「生命力」あるいは「生命」の回復というかもしれない。それをどう呼ぼうが、その裏にアイデンティティ獲得のための、いわば「母殺し」の衝動がヴァージニアの内にあったという事実は否定できない。

息子にとって「父殺し」が必要であるように、娘にとっても「母殺し」は自己の精神的自立のためには必要なプロセスであり、実際はフロイトのいうエディプス神話における「父殺し」以前にも、エレクトラのクリュタイムネストラ殺しに象徴される「母殺し」は存在していた（水田3、217）。

同じ「母殺し」といっても、息子と母親との関係とは異なる母娘の関係における「母殺し」の重要な問題点を見据えておく必要があるだろう。娘は母を否定し、殺すだけで本当の意味でのアイデンティティを確立できるのだろうか、男性との性差による自己確認のみで、全的な女性性を得、アイデンティティの確立が達成できるのかという問題である。

息子と母親の関係であれば、息子は「母殺し」により母親の支配から逃れることで自己の内なる女性性を否定し、自己本来の男性性を見つめることで、確実にそれを自分のものにできる。そういう意味で、ロレンスの作品において母の死が息子によって辛いものであると同時に必要とされるのもゆえなしというわけではない。では、娘と母の関係においてはどうか。娘は同性の母親を否定したままで、果たして己の性を見失うことはないのだろうか。自己と同様の性を持つ母を否定するということは結局自己をも否定することにならないだろうか。水田氏も「序」の中で次のように論じている。

娘は母親の否定と母親からの逃走を自己形成の出発点とし、自己認識のぼねとしてきたが、やがてそれが〈自分殺し〉でもあることに気がつく。〈母殺し〉をした娘は、自ら母になることができない。母との闘争を内面化することによって自己形成してきた娘が、自分を見つけ、母性を獲得できるのは、母を追体験し、内なる母を相対化する以外にはない。（15-6）

母親との娘の葛藤においては、このように一旦は「母殺し」をした後、いわゆる「母探し」——母との和解——へと更に展開しない限り、最終的には自己形成はない。¹⁸ 母はただ否定し拒否する対象ではなく「乗り越えるべき対象」と同時に、娘が自らのアイデンティティを求めるための「ルーツ」でもあるのだ（水田2、129）。

「母と娘」の物語においてはどのようになっていたらだろうか。娘ヴァージニアは、母親を「死んでしまいたいという気持ち」にまで追い込み、まさに一旦は母親を克服した。しかし母親の恐るべき支配力のみを意識化し、またその束縛から逃れることのみで終始して、

母親を否定することはあっても、母親を受容することなく物語は終わってしまっている。先に引用したように、物語の結末におけるヴァージニアの言葉には母親への「悪意」が込められていた。次の引用は物語の結末部分であり、二人の最後のやり取りも含まれている。

Mrs Bodoïn flashed a look at her.

'You have *all my pity!*' she said.

'Thank you, dear. You have just a bit of mine.' (248)

皮肉たっぷりなこの会話を見る限りでは、お互いに相手を認め合っているとはいいがたく、ましてやヴァージニアが母親を受容したとは考えられない。一つにはお互いの生き方の齟齬ゆえであると考えられるだろう。また一つには、それまで自分をがんじがらめにしてきた母の支配力に対する憎しみの気持ちがまだ昇華されていなかったからとも考えられる。前者は既に見てきた通り、生き方の問題であり、相手の生き方を必ずしも自己の内に取り込む必要はない。しかし後者はどうだろうか。「母の支配力」（「母と娘」221）とは一体何に起因するものだったのか。娘を自分の思うようにコントロールしたいという「母の支配力」は、いうまでもなく母性の側面の一つであった。

C・G・ユングや Erich Neumann の「グレート・マザー」研究により、母性には **terrible** な面と **tender** な面があるという捉え方は今では周知の事実となっている。加納実紀代氏はユングを踏まえて「母性愛として言われるものの中身は、いつくしみ育てること、無限抱擁、そして自己犠牲の三つがあると思う」と前置きをしつつも、「さきに言った『母性愛』の三つの要素はプラス・イメージで言われていますが、私はマイナスをはらんでいると思います」（67）として、やはり母性の二面性を強調している。

重要なのは、**terrible** な側面にせよ **tender** な側面にせよ、それらのもとを辿れば「母なるもの」の同じ衝動にいきつくということである。つまり子どもを自分の「子宮」¹⁹ の中で育ててやりたいという母性願望が根底に存在しているのだ。子どもが小さい時、その衝動は子どもにとって滋養になり、また支えにもなるが、子どもが大きくなってからは、それはむしろ子どもを束縛し、自立を阻止し、アイデンティティの確立を阻害してしまうことになる。石塚友子氏も次のように述べている。

母性のイメージ、それは一言で言うなら「抱きこむ」ということでしょう。平等・献身・無私・調和・安定・自然という言葉が連想される「母性」は、肯定的には「ありのままに受け入れる」ととらえられ、否定的には「のみこみ、同一化をはかる、独立を認めない」もの、ととらえられています。（254）

母性の **terrible** な側面と **tender** な側面は、このように表裏一体なのである。状況によっては **tender** にも **terrible** にもなり得る母性であるが、「母と娘」においてそれは恐るべき「母

の支配力」として顕現していたわけである。

さて、母親レイチェルのその **terrible** さが「年老いた一人の魔女」の比喩で描写されていたことは先に触れた通りであるが、魔女とは **Neumann** によれば母性の「否定的」側面が具現化したものである (66)。しかも注目すべきは、ヴァージニアも母親と同様、「若くて魔法にかかった魔女」(223) にたとえられている点である。また、ヴァージニアに降りかかる母の力は、周りの男たちに対しては彼らを粉々に粉砕してしまう恐るべきハンマーとなって猛威を揮っていたが、もう一点注目すべきは、「魔女のキルケ」にたとえられる母親が、「その分身」ともいうべき娘に、このハンマー——「ポドイン夫人の全生命の秘密であり、意義でもあり、そして力ともいうべきハンマー」(235) ——を譲り渡したいと考えている事実である。

And she [Rachel] had hoped to hand on the hammer to Virginia, her clever, unsolid but still actual daughter, Virginia. Virginia was the continuation of Rachel's own self. Virginia was Rachel's alter ego, her other self. (235-36)

ハンマーを譲り渡したいというレイチェルの気持ちは、自分の内なるものをヴァージニアに引き継ぎたいという願望の表現に他ならない。ハンマーは「雌特有の」恐るべき破壊作用、あるいは「雌の支配力」、「母の支配力」ともいうべきものの象徴なのだ。母親が「ハンマーのような無慈悲な気紛れさ」で男たちの頭を強打していく中、ヴァージニアも最初は無意識の内にそのハンマーから「自分の内部がむずむずする」(231) くらいの刺激を受け、「ニヤニヤ笑い」をし、ほとんどそれを譲り受けんばかりであったことを忘れてはならない。このようにヴァージニアの内にも母と同じ「雌特有の」**terrible** な要素が具わっていることは疑いない。それなのに、母を否定し見捨ててしまうような選択をすることで、彼女のアイデンティティは確立したといえるのだろうか。

アルノーではなく母親を選択すべきだったといっているわけではない。母性の精神的受容の必要性を論じているのであり、アルノーを選びつつも母性との和解はできるはずなのである。長谷川啓氏も「共感」という言葉を用いて、ヴァージニアのように傷を受けた娘の在り方について次のように論じている。

再度、イヴリン・バソフの言をあげれば、「母親と自分を同一化したり、母親に共感を寄せたりすることができるようになったとき、はじめて傷は完全に癒されるのかもしれない。(中略) 母親のことを怪物とか愚か者とか変人などと思うとき、自分のなかにも同じような性質があって、われながら嫌だと思っているため、過剰反応をしているという場合が少なくない。逆に母親に対してやさしくなれるときは、自分のことも割合好きでいられるものだ」と述べている。ユングの「すべての母親は自らの内に娘を含んでおり、すべての娘は自らの内に母親を含んでいる。すなわち、すべての女性

はそのまた母親にさかのぼって娘に伝えられていく」という説を借りながら、自分のことを深く知るためには、自分を生み育ててくれた母親のことを知らなければならない、そのために一番よい方法は、自分を母親の立場において考えてみることだと語っている。(173)

長谷川氏が主張するように、母親の立場になり、母の全容を一旦は受け入れない限り、女性性を全面的に受け入れたことにはならないのだ。たとえ受け継ぐべきものがハンマーのようなものであっても、拒否すると同時に一旦は真摯にその存在を受け入れ認めてこそ、それを昇華し、克服することも可能なのだ。にもかかわらずヴァージニアは母を容赦なく突き崩してしまふ。かくしてヴァージニアのアイデンティティ獲得は、最後の段階で不完全なままに終わってしまっているといわざるを得ない。²⁰

結

フェミニズムが近年重要視し始めた母と娘のテーマを扱ったD・H・ロレンスの「母と娘」という短編を詳細に検討することで、娘のアイデンティティ獲得の問題について考察を加えてきた。女性を描くことにかけては評判の高いロレンスであるにもかかわらず、母やとりわけ娘の視点や立場に関しては必ずしも十分に描き切っていたとはいえない。それでも「母と娘」というタイトルの作品が存在するという事実は、それなりに評価してもいいだろう。しかもロレンス文学においてはマイナーな小品として扱われるにすぎない本作品ではあるが、娘のアイデンティティということで読み直すと、今日の女性を巡る動向の中で、重要な問題点を提起しているのである。

ロレンスといえれば性愛の重要性を説いた作家としても有名である²¹が、彼にとって性愛は性のアイデンティティ獲得の究極の手段だったのである。男は内なる女性性を女に受け渡し純粋な男に、女は内なる男性性を男に譲り渡すことで純粋な女になることが可能になるのであり、それこそが男女の存在意義だというのである。このような本質主義は一見女を性役割の束縛に閉じ込め、不自由さの中で女にアイデンティティを喪失させてしまうように見える。実際その論を絶対視し振りかざせば危険思想にもなり得るのは事実である。しかしながら、まさに諸刃の剣ともいべきこの本質論は、扱い方によってはむしろ逆説的に男という異性との性差によって女のアイデンティティを獲得させることになり、今日のポスト・フェミニズムの様々な問題を解決する糸口にもなり得るのである。

その性愛に至る前段階として、人は親子関係において自己の内なる男性性、女性性を認識し受容しなくてはならない。息子が母親を否定しその束縛から脱出することで内なる男性性を認識できるのに対し、娘の場合は同性であるがゆえに問題は単純ではない。母を否定することで個として独立すると同時に、全体的な性のアイデンティティを得るためには、その母を再度受容する必要があるからだ。まず同性ゆえに母の束縛から脱しがたく、そして脱することができたとしても、そのような母を否定するのみでは自己否定に繋がってし

まうため、いい意味でも悪い意味でも母性（あるいは母性を含む女性性）の全受容が必要となる。自己の中で一旦は「母なるもの」をあえて差異化し昇華することにより、つまり、場合によっては **tender** にも **terrible** にもなり得る母性が自分の内にも潜んでいるということ認めることにより、母性の **terrible** な側面も克服でき、「母なるもの」の全受容が可能となるのだ。娘の性のアイデンティティ獲得には、母から娘へ引き継がれるべき「ミトコンドリア的要素」²² の受容がなくてはならないのである。

しかるにロレンス文学のほとんどの場合、母性の **terrible** な要素に対する集中攻撃に終始してしまっている。多くの批評家が指摘するように、ロレンス自身の母親との葛藤ゆえであっただろう。とりわけ初期の「ロレンスの、〈母性〉の支配欲・所有欲の不毛性にたいする恨みはすさまじく、〈母性〉の征服はほとんど脅迫観念のようになっていた」(山口 101) ののである。²³

「母と娘」における娘ヴァージニアの母レイチェルに対する関係も例外ではなかった。ヴァージニアは、男から独立して生きる母の在り方に自己を照射することにより、自分らしい存在の仕方——男性に寄り添い、他者との関係性を求めて生きる在り方——を見出した。その選択はとりもなおさず女性としてのアイデンティティ確立のための一つの方策となるはずであった。しかしその前段階の、娘による母親受容はなされていたのか。否。ヴァージニアは母親の **terrible** な要素に苦しみ、それをいわずらに否定するだけで克服できないまま物語は終わっており、そのような状況では自己の内なる女性性（母性）の全面的受容はできそうにない。既に見てきたように、ヴァージニアは母親を「負かしてしまった」と表現されているが、これは勝ち負けの問題ではなく、受け入れるか否かの問題なのである。物語の結末に不満が残るとすれば、その点に尽きるといっても過言ではないだろう。

女性性的一面である母性——すべてを「ありのままに受け入れ」、「無限抱擁」の世界に誘う包容力を **tender** な側面として持つ母性。それは恐るべき支配力にも変わりうるものであった。しかし、すべてを受け入れるというからには、そのような **terrible** な要素さえも受け入れてしまうのが母性原理なのだ（もともとそれは、否定されるべきものを是認することではないのはいままでもない）。母から娘へ——同性性を具えたもの同士の伝達。娘は自己のアイデンティティを確立するために、母親を否定すると同時に受け入れるという矛盾を生きることを余儀なくされるのである。

注

¹ 注釈 5 を参照のこと。

² 日本の状況については長谷川氏が次のように述べている。「一九九二年にマリアヌ・ハーシュ『母と娘の物語』(紀伊國屋書店)の翻訳が刊行され、前後して水田宗子の『フェミニズムの彼方』(講談社、一九九一年)、落合恵子の『あなたの庭では遊ばない』(同、九二年)が発刊されて以来、ようやく日本にも母と娘の関係を直視するフェミニズム批評が本格的に浮上してきた」。(158)

3 このような母娘関係が社会の裏面を浮き彫りにするというので、例えば信田氏は「一卵性母娘は、夫婦を基本とする核家族が、それほど夢のように幸せをもたらしてくれなかったという母親世代の失望感からくる揺り戻しなのです」と述べている。(112)

4 ダフネ・デュ・モーリアの『レベッカ』(1938)(貴族の称号をもつ男の二番目の妻になったヒロインが、夫の最初の妻、今は亡きレベッカにまつわる謎と対峙する心理的葛藤を描出した作品)のヒロインに典型的に見られる、女性特有のアイデンティティの危機的症狀を説明するのに、エニックは「二番目の女コンプレックス」という用語を用いた。二番目の女(二番目の妻、内縁の妻あるいは売春婦等)に見られる、自分の立場に関する不安、一番目の女(妻)への強迫観念、自己否定等の症状のことで、このモチーフは現代に至るまで映画や小説等、様々なジャンルに繰り返し現われているという。(250)

5 母娘関係におけるアイデンティティの問題を扱った作品として、トニ・モリスンの『ピラヴド』を想起する読者も少なくはないだろう。本作品にはもちろん様々なテーマがあり、奥行きが深い作品であるが、母娘に焦点を当てて読めば、特に娘のアイデンティティ探求の物語とも読める。黒人奴隷だった母親が、逃亡後、かつての所有者の白人に再び連れ戻されそうになった時、実の娘に自らが経験した奴隷の屈辱を味わわせたくないという理由で娘を殺害してしまう。母親からすれば娘に対する愛ゆえ、ということになるのだろうが、娘にとっては自己の存在否定ともいうべき娘殺し。自分を愛し認めてくれるはずの実母に殺されてしまった娘は、赤ん坊の幽霊となって、また次には成長した娘の姿で蘇り、自己のアイデンティティを取り戻すべく母親のもとに戻ってくる。最終的に娘がアイデンティティを取り戻せたのかどうか、その議論は別の機会に譲りたい。

題辞に挙げた引用は、幽霊となって戻ってきた娘が母親と共に自分たちの世界に引きこもり、そこで掛け合う心の中の叫びである。母親への娘の執着は、母親自身の罪悪感も相俟って、母親を消耗させていく。お互いに「あなたはわたしのもの」「おまえはわたしのもの」と言葉を掛け合う母親と娘。それは所有願望——愛の否定的属性の一つ——の現れに他ならない。

6 ミレット以後のフェミニスト批評、あるいはそれらに対抗するノーマン・メイラーなどのロレンス弁護の批評については拙論を参照のこと。(田部井1、192)

7 本作品と『恋する女たち』はもともと『姉妹』というタイトルであったものが2作品に分かれたものであり、姉妹が登場する。平井雅子氏(Hirai)が『姉妹』をテーマに *Sisters in Literature* を出版しているが、氏の関心はアンティゴネーからジョージ・エリオットの『ミドルマーチ』、フォスターの『ハワーズ・エンド』、そしてロレンスの『恋する女たち』へと連綿と引き継がれている一つの「中心的なイメージ、テーマ、筋」(2)ともいうべき「姉妹」がいかにか描かれているかを見ていき、そこに共通点を見出すことにある。

8 母娘を扱った作品が全くないというわけではない。Blanchard が扱っている『虹』、『セント・モーア』はその例である。しかしその関係が物語の中心になっているとはいいがたいだろう。また「娘」がタイトルについている作品もあるが、例えば「博労の娘」(“The Horse Dealer’s Daughter”1921)においては母が不在であり、「牧師の娘」(“Daughters of the Vicar”1913)においても母と娘の関係についての描写は希薄であるといったように、やはり母親との関係における娘の在り方に作者の関心があるとは思えない。

9 Carol Sklenicka がロレンス文学における父娘の関係について鋭いメスを入れているので参照のこと。

10 本稿で「母性」という時、フェミニストたちが母性「神話」(E・バダンテール参照)あるいは「母性幻想」として排撃しようと闘っている、いわゆる性役割分業的ジェンダーの発想を基に定着してきた母性を念頭には置いていない。むしろ、江原由美子氏の「リブは母性を否定したのではない、母性幻想を否定したのだ」(196)という主張を論拠に、ユングや Neumann らが主張する、より根源的な母性、生物学的(心理学的)な性差から生じ

るであろう「母なるもの」を念頭に置いて論を進めていることを断っておく。因みにロレンスが批判した「母性」も、ジェンダー的母性ではなかったことを確認しておきたい。

11 『息子と恋人』(*Sons and Lovers*)を「多くの若者(男性)の悲劇」の物語と捉えるならば、『虹』は「母親や母親の価値観との葛藤の中から時期をいかに定義づけていくか」ということで苦しむ、多くの若者(女性)の悲劇(76)であるという指摘も非常に新鮮で興味深い。

12 他にも、母の「共依存」の問題が存在しているかもしれない。「共依存とは、ひと言でいえば、他者との関係に嗜癖する、つまり『愛情という名を借りて相手を支配する』こと」(116)だと信田氏は論じている。

13 母親と父親的存在の間で葛藤する娘といったこの設定に、Rudermanと同様に「子どもの成長」に父性愛と母性愛のどちらが重要であるかといった問題を見出すことは可能ではあるが、本稿では娘のアイデンティティ探求との関連でこの葛藤も論じた。

14 石塚氏が「母として」あることの問題性として「私という主体がない」ということを指摘しているが、ヴァージニアはそのような在り方にこそ自己のアイデンティティの証を見出したといえる。

15 ロレンスが創作活動において、とりわけ『虹』以降の執筆活動において目指したのは、「ダイヤモンド」や「炭」(表層的な仮面)ではなく「炭素」(存在そのものの本質)——ここでは女性の内なる「雌なるもの」——を描くことにあったことが今更ながら思い起こされる。(田部井1、196)

16 筆者はかつて、ロレンスの説く女性解放、女の自立とは、徒に男性原理に走り、自らの原理である女性原理を歪めてしまい閉塞状態に陥ってしまうことではなく、自己に内在すべき本来の女性原理を取り戻し、いかにそれを発揮することであったと論じた。(田部井1、273)

17 因みにロレンスは『羽鱗の蛇』(*The Plumed Serpent*)のテレサをハーレム的な女性として描いている。彼女は、身も心も男性に捧げることから一見隷従しているように見えるが、男性の神秘的な生命力を引き出し、精神的にも肉体的にも癒す力を具えた女性として描かれており、ロレンスは現代女性のケイトに嫉妬の気持ちを抱かせている。もっともケイトが最終的に彼女の生き方を受け入れられるかどうかは保留されているが。

18 水田氏によると、一般的に「近代女性文学における娘の母の否定＝〈母殺し〉の物語は、やがて〈母探し〉の物語へと展開していく」(15)という。例えば、エイミ・タンの『ジョイ・ラック・クラブ』のテーマもまた母親探し、そして母親との和解であった。「自分を知るためには母親を知らなければならないという、ひとつのテーマ」(水田2、131)が窺える。

19 子宮はその中で胎児を育む器官であるが、胎児が外に出る準備ができたにもかかわらず、陣痛と共に母親が子どもをそこから出すことを拒む時、子どもは其中で窒息死してしまう可能性もある。そういう意味で子宮は母性の二面性を表象する器官である。

20 このような結末になっているのは、ロレンス自身の母親との葛藤が、そして支配的な母に対する彼の被害妄想的忌避感が影を落としているともいえよう。また、ロレンス自身が男であったために、母性を受け入れる必要がなかったからともいえるかもしれない。

21 “Morality and the Novel”の中でロレンス自身が、人類にとって重要な関係は常に男女関係であって、その他の関係は「副次的」なものにすぎないと論じている。(531)

22 2004年12月9日付けの朝日新聞(38面)で、北朝鮮による日本人拉致問題が扱われた。その一連の流れの中で、横田めぐみさんの遺骨であると北朝鮮が提示してきた骨が本人のものであるかどうかを検査するためにDNA鑑定が行われたが、本人ではないという結果が出された。その根拠になった「決めては、細胞内のミトコンドリアと呼ばれる器官に含まれるDNAだった」という。「ミトコンドリアのDNAは主に母親から受け継ぐ。帝

京大法医学研究室は、横田めぐみさんのへその緒から得られた DNA 情報、娘キム・ヘギョンさん、母早紀江さんのものとの照合から、今回の遺骨がめぐみさんのものではないと断定した」という。つまり、母からめぐみさんへ、そしてめぐみさんからその娘へと受け継がれているべき部分が問題の骨からは見つからなかったというのである。女から女へ引き継がれるものが DNA レヴェルでも存在するという事実は非常に興味深いものがあった。(拉致問題が一日も早く解決されることを祈りつつ……。)

²³ ロレンスの母性批判の筆の勢いは彼の執筆中期に至っても依然として衰えることはなかった。ようやく『チャタレー卿夫人の恋人』を書くに至って、子どもを積極的に求めるユニーの描写に窺えるように、母性の tender な面を認めるようになっていく。

Works Cited

- D.H.Lawrence. "The Child and His Mother." *Psychoanalysis and the Unconscious in Fantasia of the Unconscious & Psychoanalysis and the Unconscious*. Harmondsworth: Penguin Books, 1977.
- . "Cocksure Women and Hensure Men." *Phoenix II*. Ed. W. Roberts & H.T.Moore. Harmondsworth: Penguin Books, 1978.
- . *Collected Letters of D.H.Lawrence*. Vol.I. Ed. H.T. Moore. London, Melbourne,Toronto: Heinemann, 1962.
- . "Education and Sex in Man, Woman and Child." *Fantasia of the Unconscious in Fantasia of the Unconscious & Psychoanalysis and the Unconscious*.
- . "Introduction to Pictures." *Phoenix: The Posthumous Papers (1936)*. Ed. E. McDonald. New York: The Viking P., 1974.
- . "Love." *Phoenix*.
- . "Matriarchy." *Phoenix II*.
- . "Morality and the Novel." *Phoenix*.
- . "Mother and Daughter." *The Princess and Other Stories*. Ed. Keith Sagar. Harmondsworth: Penguin Books, 1976.
- . "The Mother, by Grazia Deledda." *Phoenix*.
- . "The Reality of Peace." *Phoenix*.
- . "Study of Thomas Hardy." *Phoenix*.
- . "Why the Novel Matters." *Phoenix*.
- Blanchard, Lydia. "Mothers and Daughters in D.H.Lawrence: *The Rainbow* and Selected Shorter Works." *Lawrence and Women*. Ed. A. Smith. London: Vision P., 1978.
- Faludi, Susan. "Introduction." *Backlash*. New York: Doubleday, 1991.
- Hirai, Masako. *Sisters in Literature: Female Sexuality in Antigone, Middlemarch, Howards End and Women in Love*. London: Macmillan P. Ltd., 1998.

- MacLeod, Sheila. *Lawrence's Men and Women*. London: Heinemann, 1985.
- Meyers, Jeffrey. "Katherine Mansfield, Gurdjieff, and Lawrence's 'Mother and Daughter,'" *Twentieth Century Literature* 22 (December 1976): 452.
- Morrison, Tony. *Beloved*. New York: A Plume Book, 1988.
- Neumann, Erich. *The Great Mother: An Analysis of the Archetype*. Trans. R. Manheim. Princeton: Princeton U. P., 1955.
- Ruderman, Judith. *D.H.Lawrence and the Devouring Mother*. Durham: Duke U. P., 1984.
- Simpson, Hilary. *D.H.Lawrence and Feminism*. DeKalb: Northern Illinois U. P., 1982.
- Sklenicka, Carol. *D.H.Lawrence and the Child*. Columbia and London: U. of Missouri P., 1991.
- 青木やよひ. 「科学技術と女のからだ考——生殖の自己管理に向けて」. 『「母性」を解読する』. グループ・母性解読講座. 有斐閣, 1994.
- 石塚友子. 『運動の中の母性主義』について思う. 『「母性」を解読する』.
- エニック, ナタリー. 『物語のなかの女たち——アイデンティティをめぐって——』. 内村瑠美子他訳. 青山社, 2003.
- 江原由美子. 「リブの主張と母性観」. 『「母性」を解読する』.
- 大日向雅美. 『母性愛神話の罨』. 日本評論社, 2002.
- 金井淑子. 『ポストモダン・フェミニズム』. 勁草書房, 1991.
- 加納実紀代. 「天皇制と母性そのフカーイ関係」. 『「母性」を解読する』.
- 斎藤学. 『インナーマザーは支配する——侵入する「お母さん」は危ない——』. 新講社, 1998.
- 棚沢直子. 「イリガライの母娘関係論を読む——日本・西欧比較の方法に向けて」. 『母と娘のフェミニズム——近代家族を超えて』. 水田宗子他編著. 田畑書店, 1996.
- 田部井世志子. 1 「炭素とダイヤモンド——フェミニズムとの関連で観た D.H.Lawrence の意義——」. 『英語・英文学研究の再構築』. 新村昭雄・安德軍一・山崎和夫編. 九州大学出版会, 1993.
- . 2 「D・H・ロレンスのポスト・フェミニズム的意義」. 『D.H.ロレンスと現代』. 日本ロレンス協会編. 国書刊行会, 1995.
- 信田さよ子. 『一卵性母娘な関係』. 主婦の友社, 1997.
- 長谷川 啓. 「〈母〉に出会う旅——津島佑子『風よ、空駆ける風よ』を中心に」. 『母と娘のフェミニズム』.
- バダンテール, E. 『母性という神話』. 鈴木晶訳. 筑摩書房, 1991.
- 水田宗子. 1 「序 母と娘をめぐるフェミニズムの現在」. 『母と娘のフェミニズム』.
- . 2 「娘による母物語から母による母物語へ」. 『母と娘のフェミニズム』.
- . 3 「【シンポジウム】母性を問う——〈母と娘〉という主題」. 『母と娘のフェミニズ

ム』.

水田宗子他. 「あとがき」. 『母と娘のフェミニズム』.

山口哲生. 『D.H.ロレンスにおける〈母〉』. 弓書房, 1991.